

蜷川式胤と古美術写真家横山松三郎の業績

はじめに

古い写真は、撮られた時や場所が遠ければ遠いほど見るものに強い印象を与える。写真はいつも写された対象に注意が集中するもので、媒体としてのフィルムやプリントに注意を向けることは少ない。映像は雄弁であるが、それだけがメッセージを持っているのではない。本稿で述べようとする、偶然に一括して発見されたガラス原板とそれに関連する資料は、当時の映像とともに明治初頭に文化財保存のために働いた人々の姿を彷彿とさせる。その人々の中心にいたのが蜷川式胤である。

「ある日私は彼(蜷川)を勾引し、拒む彼を私の人力車に乗せて写真師のところへ連れて行き、彼の最初にして唯一の写真撮らせた。」
エドワード・モース著『日本その日その日』にこの文章とともに載せられた一枚の写真はいまポストン美術館の図書館にある。最近、その原板が現在京都国立博物館に保存されていることを知りえた。¹

ここに登場する蜷川式胤を通して、明治初頭の仕事をここで垣間

みることにしたい。

天保六年(一八三八)蜷川式胤は京都八条大宮に生まれた。孫に当たる親正氏によれば「幼時から玩古の癖があり、日常の遊びにも土を拵ね、瓦を撫で、歴代家学の有職故実と父の國学とに育ち、長ずるに及び和漢の書を読渉し、仏及び英の洋書にも親しんでいた」(「蜷川式胤と『観古図説』に就て」という。明治二年五月維新政府の弁官より東京へ出仕することを命ぜられ、制度調査掛を拝命する。七月制度局調査掛に任命され、同月十八日権少史、九月二十五日には少史になる。明治四年七月少史被廢。同年外務省外務大録に任ぜられ、編輯課付となる。同年十一月特命全權大使岩倉具視が欧米各国へ差遣に付き、御用書類下調掛りを拝命。「明治四年七、八月には町田久成、内田正雄らと常設の博物館を上野及び芝に開設しようと建議したが、時期尚早とされその時は果たし得なかった。しかし更に九月田中芳男とはかり、九段坂上招魂社で小博覧会を開き、大学南校の博物館本、理科機械などを陳列した。」「同年十月町田久成、横山由清とはかり、湯島大聖堂の大成殿を博物館に当てようと請願したが志ならず、再び翌五年正月八日町田、田中と共に博覧会の必要を上

申して認められ、大成殿において開催することになった。「なお博覧会を常設にすべきとの上申も認められたがこれは東京博物館として実現した。ついで京都、奈良にも常設の博物館の設置を具申し採用された。」明治四年十二月文部省博物館御用兼務。そして、明治五年正月文部省八等出仕、博物館御用係となるのである。(以上引用は『出仕履歴』⁽²⁾を参考にした)

旧江戸城写真帖

『旧江戸城写真帳』は東京国立博物館に保管されている記録類の一つである。『東京帝室博物館歴史資料台帳』の記録では「四ツ切形、着色写真六十四枚明治四年蝮川式胤製、横山松三郎撮影、高橋由一着色、他に地図二枚」とあり、最後の頁第六十四図の台紙右下には「写真師横山松三郎 彩色高橋由一」と蝮川によって記されている。この『旧江戸城写真帳』の製作は蝮川式胤によって設定・組織された仕事であった⁽³⁾。文化財保存とその啓蒙に関する認識なしにこのような発想はありえなかつたに違いない。古器物保存という目的のもとにこの製作が具体化されたことは蝮川の説得力と実行力によるものであろう。

この写真帖は写真史においては明治初期の写真記録の数少ない例として従来より知られているものである。公的な記録資料という意識のもとに写真の記録性を活用した点では、きわめて早い例と言えるよう。

また近代絵画史よりの観点からは、写真の着色に高橋由一が当たっていた事に注目される。高橋由一は近代初期の洋画史上にその名

を知られる人である。この着色は世に知られているところの彼の作品群を製作する時期以前の仕事であった⁽⁴⁾。それは、明治期の他の着色写真に較べて精密さに欠けるように見受けられるかも知れない。しかしよく見ると、神経質に色を塗り込んだり、量産のために機械的に着色した乱雑さとは異なり、単色の下絵に透明絵具で色を置く、水彩画を描くような筆致を見ることが出来る。これはすなわち画家の筆遣いである。写真史家の一部には雑な着色と評する向きもあるが、それは少々的是なずれの見方と言うものであろう。

着色と共に建物や場所の名前などがペン字で書き込まれている。また「明治四年末亥写生之 蝮川式胤」と款記した「東京の図」「京城図」の二枚の墨線書き着色の地図が添付されている。これらの記録説明と添付地図の効果によってこの写真帳の完成度は実用水準を十分満たしている。

また、この『旧江戸城写真帳』には蝮川による文書が貼付されている。それは太政官弁官宛の伺書の写しで、「天下ノ勢イ昔時ト相反シ城櫓塹溝ハ守攻ノ利易ニ関セサル者ノ如ク相成追々破壊御取繕イモ無益ニ属シ候様アリ之因テ破壊ニ不相至内写真ニテ基形況ヲ留置度奉願候是ハ後世ニ至リ亦博覧ノ一種ニモ相成制度ノ沿革時勢ノ流転モ随テ可被相認儀ニ付御許可容被下度此段奉伺候以上 辛未二月 少史蝮川式胤 弁官御中」(写真帳貼付分、傍線部は原本による)。「右ハ直ニ御採用ニ付此地城ノ写真出来候也 写真師横山松三郎」と、写真帳製作の意図と顛末が簡単にわかる内容である。こうして旧江戸城の撮影は許可され、横山松三郎等はさっそく撮影作業にとりかかる。それは明治四年二月の事であった。

この時に撮影された写真原板は昭和六十一年に発見され、確認す

る機会を得た⁵。その原板はかなり凹凸のあるガラスで、ガラス湿板法によるものである。写真帳六十四枚の内十枚が確認され、写真帳には使われていないが同じ時に撮影した原板が三枚含まれていた。当時撮影されたのは全部で約百枚とされている。原板の寸法は222×193 mm～244×197 mm。写真帳では第十八図に当たる「本丸書院二重櫓及重箱櫓図」の原板のちょうど空の部分のガラス面には「明治四年 二月九日 横山松三郎 写之」と朱書されている。また木製の原板収納箱の側面には「明治四年 製 通天樓横山」とこれも朱書である。(通天樓は上野池之端仲町七番地にあった樓山の写場兼画塾の名である⁶)

ところで日本で初めて写真館を開いた人物として長崎の上野彦馬と横浜の下岡蓮杖の名が知られるが、下岡蓮杖の写真とされる外国人みやげ用の横浜写真⁷の中に、横山松三郎の残した旧江戸城写真原板と同時に写されたと確認できるものがある。焼き込まれた名札と画面との比率から見て写真の寸法はそう大きくはない。せいぜい手札判程度であろうか⁸。横山のアングルとはほんの少しずれたものもあり、また横山の写真では見られない人物群が写り込んでいる場合もある。おそらく同行した写真師が撮影したのであろう。この時同行したと認められるのは製作者の蜷川式胤写真師内田九一である。また最近、蜷川家に伝わったという焼付け写真が見つかり、これも同時期に写されたものであることが確認できた。横山松三郎撮影の写真には写されていなかった人物群が写っており、意図的に写された記念写真と見ることができるといえる。焼付けの余白には「二重橋 蜷川式胤 明治四年 実写」とペンで記されている⁹。

これで、(一)旧江戸城写真帖に使われている横山松三郎の撮影し

た写真群、(二)下岡蓮杖の写真とされる旧江戸城の写真群、(三)蜷川家の二重橋の記念写真をはじめとする写真群、と同じ場所で撮られた3種類の写真群が確認できる。三つの写真群はそれぞれまともに所収しており、三種類の写真寸法から少なくとも三種類の写真機が使用されていたことが推測できよう。故にこの時の撮影のそれぞれの撮影者と取材目的は、はっきりと分担されていたのではないかと思われる。桜田見附の写真(原色図版参照)を見ると、手前中央には大型の写真機を構えた情景が観察できる。実際に複数の写真機が用意され撮影者も複数存在したことがこれでわかる。写真師横山松三郎のもとに写真師内田九一が撮影に加わり、さらに蜷川式胤も一緒に撮影作業に参加していたと考えても良いのではなからうか。

当時の撮影技術の手順もこの推測と矛盾するものではない。ガラス湿板法ということは先に述べたが、この方法は撮影の直前にガラス板に感光材を塗布し、それが乾かないうちに撮影し、その後ただちに現像しなければならぬというものである。感光材の塗布、撮り枠への装填、現像、定着は撮影につねに付随した作業で、そのため撮影にはいつでも暗室が必須の設備である。暗室から離れた戸外で撮影するときには組立式や駕籠式の可搬暗室を携行した。撮影現場の傍らにはこの暗室を運び、中に人が入って作業したのである。当然人手は相当数必要になり、暗室内の仕事には専門の助手が当たらなければならない。小規模の撮影作業でも暗室設備が不要になることはない。大きな規模の撮影作業を進めるとなれば複数の撮影者が入れ替わりながら同時に作業することが、むしろ無駄もなく合理的であったと考えられる。

横山松三郎はかつて慶応元年から三年頃まで下岡蓮杖の弟子であ

った。¹⁰ 明治三年夏、二人は日光入山を許され撮影を行ない徳川家に献上したという。この時は、四ツ切判、立体写真機、薬品、種板などを車で運び、助手、人夫を含め約十名で半年間滞在した。¹¹ 旧江戸城撮影の場合は地の利もあり、時間的には比較にならないが人数は日光と同程度必要であったのではないだろうか。

社寺宝物検査

蜷川式胤について、よく知られていることのひとつは、明治五年の壬申検査に携わり、その際の詳細な記録を日記として残していることである。なかでも正倉院開封については、その際の貴重な記録として注目されている。正倉院の開封は江戸時代では天保四年を最後にそれ以降は行なわれておらず、明治政府は明治五年に初めて開封調査を許可したのである。開封は同年八月十二日より二十三日までにわたって実施された。¹²

「大和國東大寺の寶庫を開封する議起る所のくたり

大和國東大寺の寶庫正倉院に千有余年前の古器數々是れ有るにより 祇官及民部省並に宮内省等より開封して検査仕り度旨太政官へ申立ニ相成候へ凡何れも是迄許可ニ相成ならず」(『奈良の筋道』)

維新以来許可のなかった正倉院の開封を初めて認めたことには日本のウィーン万国博覧会参加という政府の外交上の理由があった。

蜷川の日記『奈良の筋道』に宝物検査巡回の日取りと見積の記録がある。

「 此度巡回の日取見積り

華族行四十一日巡回六十一日滞在廿日

右日數定則通りを以テ御渡し相成り又月給は六七八三ヶ月分一時ニ御渡しに相成申候 何れも同し

千百三十一円七十八錢 町田

八百七十七円七十三錢 内田

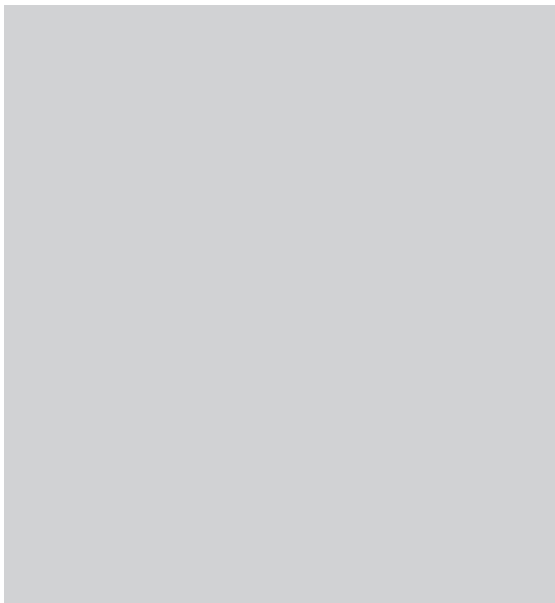
五百八十七円十三錢 蜷川三ヶ月分月給二百十円

九百八十三円五十一錢 世古

岸

寫眞師 横山松三郎 を同行して巡回の先ニて古器物及古き建物を寫眞取らせて博物館の沿革に備へ度町田蜷川見込に決定し私費にて仕る可くの處此寫眞塲國へも廻し候はゞ宜敷ニ付塲國博覧会事務局右巡回の先々にて寫眞致し候様に隨行被仰付入費金及路費迄此局と出る事に相成り申候

油畫師 高橋由一 塲國博覧會に油畫差出す爲右巡回の先々にて



挿図1 東大寺南大門

下圖取候様隨行塙國博覽會事務局と被仰付爲路費 具紙も相渡り申候

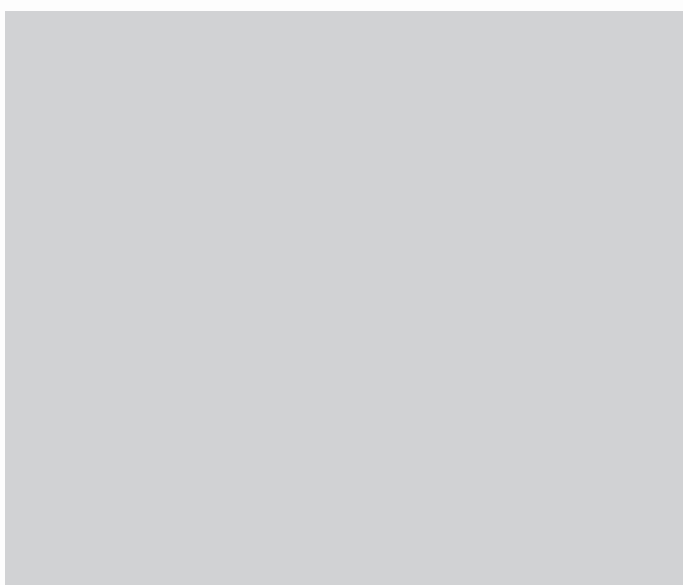
笠倉鉄之助 右巡回の先々にて魚鳥の狩猟の事を取調へる様塙國博覽會事務局と被仰付路費も此局と渡申候

柏木政矩 巡回の先々にて古器物寫し方の爲に町田、内田、蜷川、三人の私費にて同行仕り此圖物出来上り候はゞ博物館の沿革に備ふ路費乃日々手當三人と出す

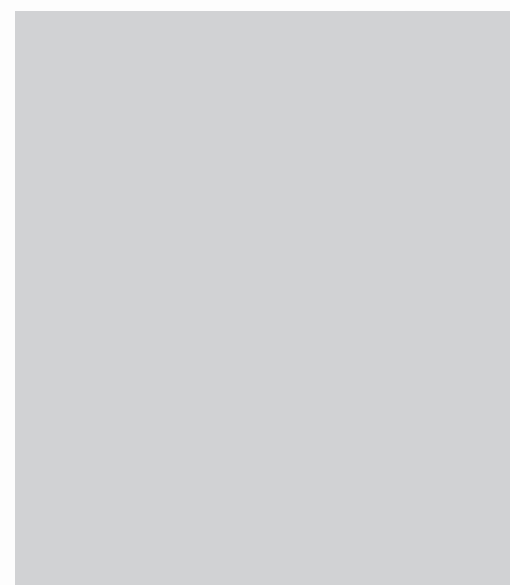
諸考るに時運のめくるや幸ひなるか塙國博覽會の爲に我國の博覽會の助となる會計の満る哉品物の集まるや且は内外博覽會の爲に東大寺の正倉院を開くる事に相成る其役に加り諸官人のあまた有りと伝え此これに勝れる樂しの御用は無かりしと思ふ」

かねてより蜷川は、大部亟町田久成、文部六等出仕内田正雄らとともに博物館設置を建白してきた。本来はそのための予備調査として考えられていたようであるが、実施についてはウィーン万国博覽會のための準備と兼ねた調査になっていくことが分かる。この仕事があつた目的を併せて叶えることとなり、加えて正倉院の開封にまでおよぶ幸運に、蜷川は素直に喜びを記している。そして旧江戸城写真帖製作の際の写真師横山松三郎、絵師高橋由一を伴うことも記されている。横山松三郎はこの時の請求書を内田九一と一緒に出していることから、内田九一も横山の助手として参加していたのだろう。

近代日本がまさに国際化しようとする時期に、ともすれば忘れ去られそうな文化財調査事業を、国際社会参加のひとつである万国博覽會に関連づける事ができたのは、よく時宜を得たことと言える。外務大録としての蜷川式胤は万国博覽會参加準備のため、博物館設



挿図3 法隆寺金銅仏（現法隆寺献納宝物）



挿図2 法隆寺宝物（現法隆寺献納宝物）

置推進者のひとりである蜷川は博物館設立時の準備のために、この絶好の機会を活用できたのであった。彼の日記『奈良の筋道』は横山の写真を貼り混ぜながらそのころの有様を詳細に伝えているのである。¹³⁾

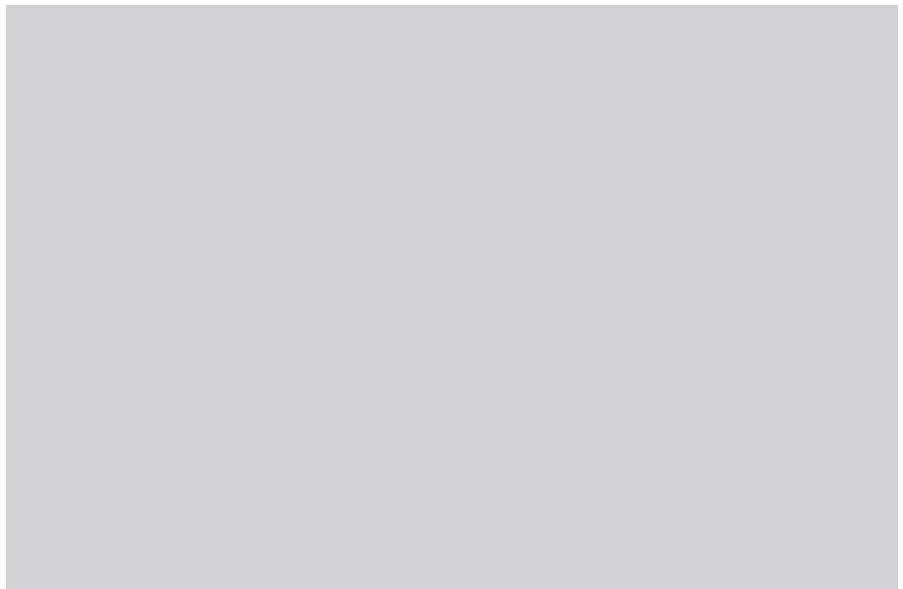
この時、横山松三郎が撮った写真原板は先に紹介した旧江戸城写真原板と一緒に発見されている。ほとんどが立体写真で、万国博覧会のために撮影されたものである。当時立体写真は、特に欧米ではたいへん盛んで、何枚もの立体写真を観せるための装置もあった。おそらく当時の万国博覧会では人気を集めた出陳物であったことだろう。

写真の焼付けは立体写真が三百二十枚、四切写真九十枚が東京国立博物館に所蔵されており、蜷川の日記『奈良の筋道』に貼込まれている八十枚の内三十枚は含まれていないことから、この調査で撮られた写真は少なくとも四百四十枚以上とされる。¹⁴⁾ そのうちで発見された原板は百四十七枚の立体写真である。寸法は106×158 mmで東京国立博物館所蔵の焼付け写真はこの原板の密着焼付け写真であることは間違いない。先の請求書によれば焼付け写真は三万三千枚、代金は二千六十二両ということである。

写真の主な内容は、熱田神宮、伊勢神宮、京都御所、正倉院開封の記録、春日大社、東大寺、興福寺、法隆寺等の社寺の建物や彫刻・宝物類等である。現在知られているまとまった文化財の写真としてはおそらくもっとも古いものであろう。

それから後、本格的な文化財の写真記録が撮影されるのは明治二十年代に入ってからのことである。明治二十一年のフェノロサ、岡倉天心らによる宮内庁臨時全国宝物取調局の古社寺所蔵什宝調査に

において、小川一真が撮影を委託されている。¹⁵⁾ 明治二十二年に「国華」が創刊、明治二十九年には法隆寺諸堂の撮影が行なわれ、後日『法隆寺諸堂宇撮影帖』¹⁶⁾としてコロタイプ版で出版されるなど、古美術調査の記録や出版がさかんに行われるようになる。社寺宝物検査における撮影は、これらの動きに先行する初期の美術写真を開拓した国家的な事業として記憶されねばならない。



挿図 4 法隆寺金堂内陣

むすび

蜷川式胤が明治初期の日本の文化財に対してつくした功績は大きい。ここで取り上げたこれらの記録写真は、その被写体の珍しさはともかく撮影された目的が明確であり、公的である点を注目すべきである。彼は写真をいち早く採り入れ、その有用性を活用するため方法を講じた第一人者である。彼によって制作された記録写真は明治政府の文化財政策に対して説得力を持ったことであろう。彼が残した詳細な記録と横山松三郎の写真に加え、その原板が発見されたことにより彼らの仕事を改めて見直すことができる。

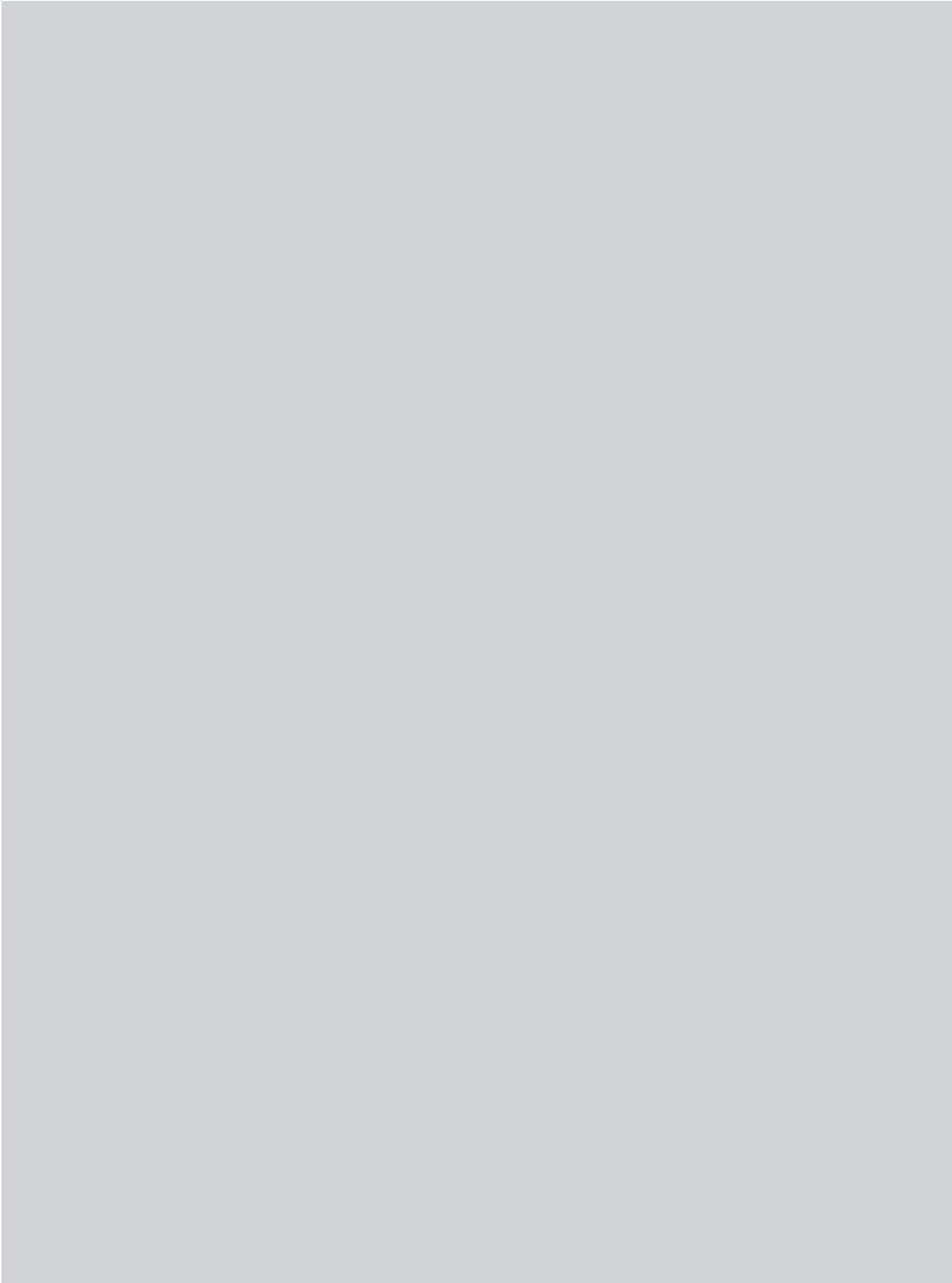
蜷川や横山の事績を、写真原板の発見によりさらにヴィヴッドな様相を帯びて語ることができた。このように、写真史の実態を雄弁に物語るものとしてプリントとともに原板は有力な生資料として位置づけることができるのである。

〈注〉

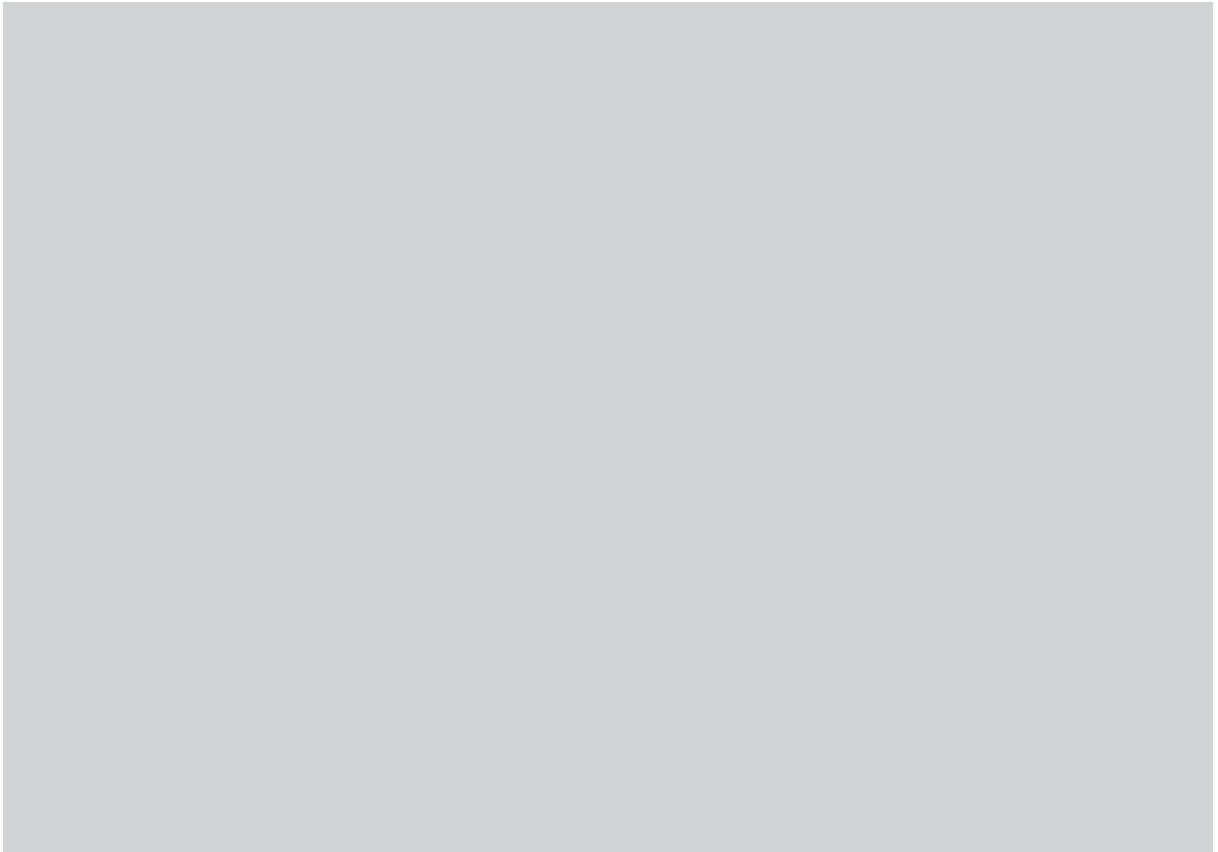
- 1 この写真原板の存在については下坂守氏より御教示を得た。京都国立博物館所蔵のこの原板はガラス湿板法、現状は桐箱に入り原板のまま鑑賞できるようにガラス面に黒紙を当ててある。表面にニス止め処理をしてあるので引伸機には掛けられない。寸法は103×75mm。ポストン美術館所蔵の写真には「明治十二年七月十五日写」と記されている。(蜷川親正氏による。)
- 2 「出仕履歴」蜷川第一(昭和八年)、「蜷川式胤と『観古図説』に就て」蜷川親正氏(昭和四十八年)による。
- 3 この写真帳が横山松三郎・高橋由一によって撮影・着色され、蜷川式胤によって製作された経緯・背景については原田實氏が「MUSEUM」No.334(昭和五十四年)に詳しく紹介されている。

- 4 高橋由一(1828-1894)洋画家、写実的描写で知られる。近代日本洋画家として最初の人とされる。明治四年二月当時は寺院寮少属に任官している。彼の作品として有名なものは明治六年「天絵樓」(後に天絵社と改称)を開いた後に描かれている。
- 5 旧江戸城写真帖に関係する四切写真原板は十三枚、同時に壬申検査の際に撮られた立体写真の原板が百四十七枚発見され、あわせて現在日本科学技術史博物館準備委員会が保管している。
- 6 横山松三郎(1838-1894)写真家、洋画家。函館に來航したロシア人画工レーマンの助手となり洋画法を独学、横浜で下岡蓮杖に写真術を学ぶ。明治元年上野池之端仲町七番地に写真館通天樓をひらく。門人に宮下欽、松崎晋二、片岡久米、大山武助、鈴木真一らが、内田九一、木津幸吉、横山松造らも出入りした。洋画塾を併設したのは明治六年とされ亀井至一、亀井竹次郎、山田成章、村井龍之輔らが集まった。蜷川も出入りしたのではないかと考えられるが未だ不明である。
- 7 明治期には早くから外国人のみやげ用の写真が販売されていた。日本の風景や風俗を撮影したものが貼込まれ、蒔絵や螺鈿で仕上げた表紙の豪華な写真帳になったものもあつた。横浜写真と呼び称されているものである。焼き付け写真の上から着色したものが大半で、写真の一枚ずつには隅に小さく名札を焼き込んであり、ローマ字と日本語とを併記してあるものが多い。
- 8 手札判は80×105mmから90×120mmほどのサイズ。世に紹介されている古写真の大部分が被写体の名称と撮影者、時代などのみを表示しているが、できるだけ正確なデータ、原板の寸法に画像の寸法とそれぞれ感光方式等を正確に記録・明示してほしいものである。貴重な資料を調査する機会を得た者の義務であろう。
- 9 孫にあたる蜷川親正氏によれば式胤の筆跡であるとの事である。
- 10 下岡蓮杖(1823-1914)江戸の奥絵師狩野董川に絵を学ぶ。写真に興味を持ち独学に近い状況の中で非常な苦勞の末に会得。長崎の上野彦馬と並び日本の営業写真の開祖とされる。「横浜写真」も彼が始めたのではないとも言われる。横山松三郎を最初に、鈴木真一、江崎礼二、中島待乳、臼井秀三郎、桜田安太郎らが門人として世に出た。上野彦馬の高弟内田九一も門下にあつた時期があるとも言われる。神奈川県

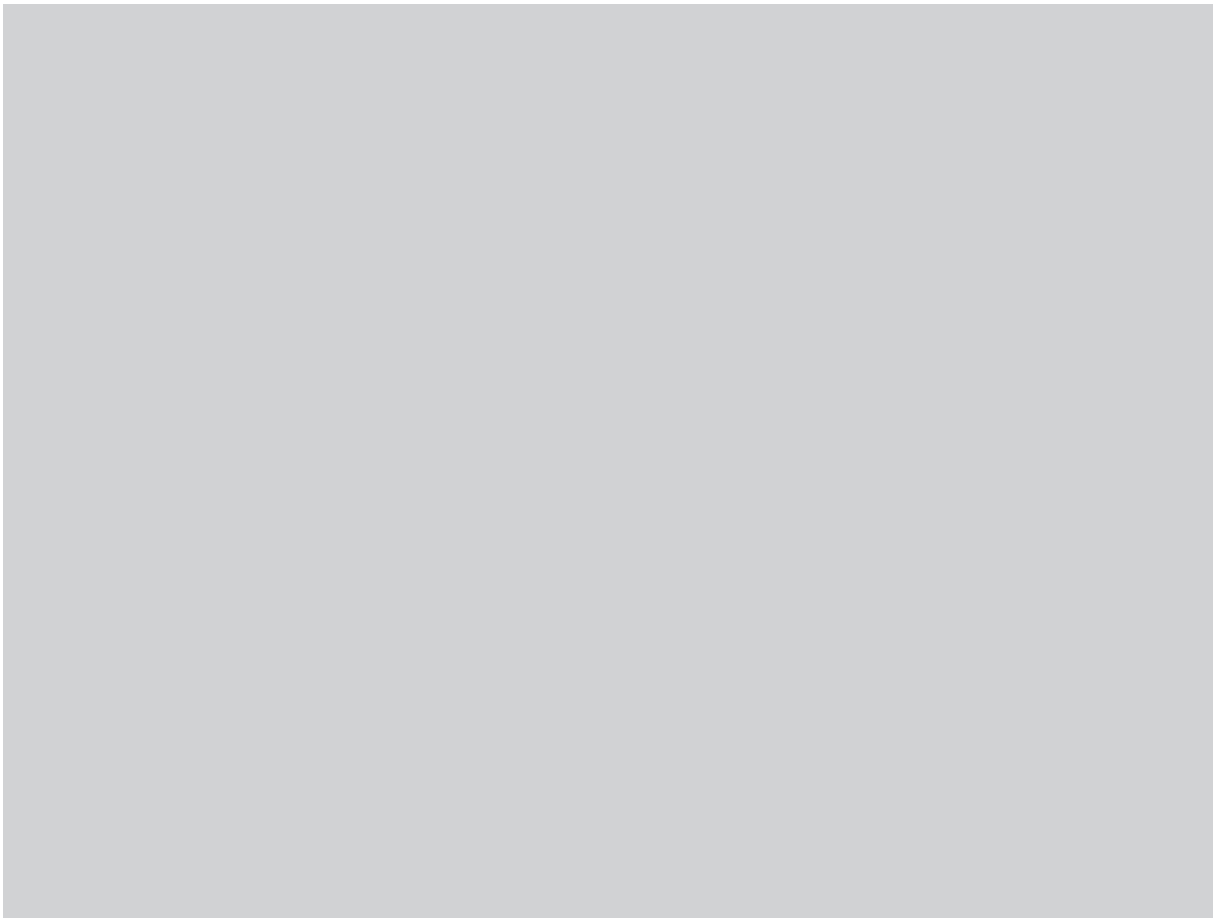
- 美術風土記・幕末明治初期篇」(昭和四十五年)
 写真史研究家桑島洋一氏による。
- 11 蜷川は前年(明治四年)より外務大録の職にあつた。十二月に文部省
 博物館御用兼務、翌明治五年一月には文部省八等出仕となり、宝物調
 査に携わった。公式記録としては「壬申検査古器物目録」(五冊)と「壬
 申検査社寺宝物図集」(三十一帖)がある。
- 12 「奈良の筋道」は彼の日記のうちの三冊。「正倉院の研究 明治五年正
 倉院開封に関する日記」(昭和四年)「東京国立博物館百年史」(昭和四
 十八年)、に抄録されている。
- 13 「日本写真全集第九巻、民俗と伝統、『明治の文化財記録 横山松三郎・
 小川一真』」(昭和六十二年)池田厚史氏による。
- 14 小川一真 (1860-1929)米国に学び明治十八年帰国。明治後期の写真
 新技術の先駆者。明治二十一年四月月にわたりフェノロサ、九鬼隆一、
 岡倉覚三、浜尾新等による古美術什器宝物調査撮影を委託される。明
 治二十二年から発刊された「國華」の写真を担当、明治四十三年洋画
 の黒田清輝とともに帝室技芸員となる。
- 15 この撮影は工藤精華 (1848-1929)であろう。法隆寺の写真帖について
 は東京国立博物館に所蔵されている彼の写真の中にもまったく同一のも
 のが認められる。「写真・今世紀の法隆寺」(昭和六十年)。工藤は明治
 十一年東京で「古書画を研究して其写真を写し出し」、中尊寺、日光東
 照宮の撮影に携わる。その後、奈良に住み古文化財の写真を撮影・販
 売した古美術写真専門の嚆矢。明治末から大正にかけてコロタイプ写
 真集「日本精華」十一冊、「東洋精華」三冊を出版している。
- 16



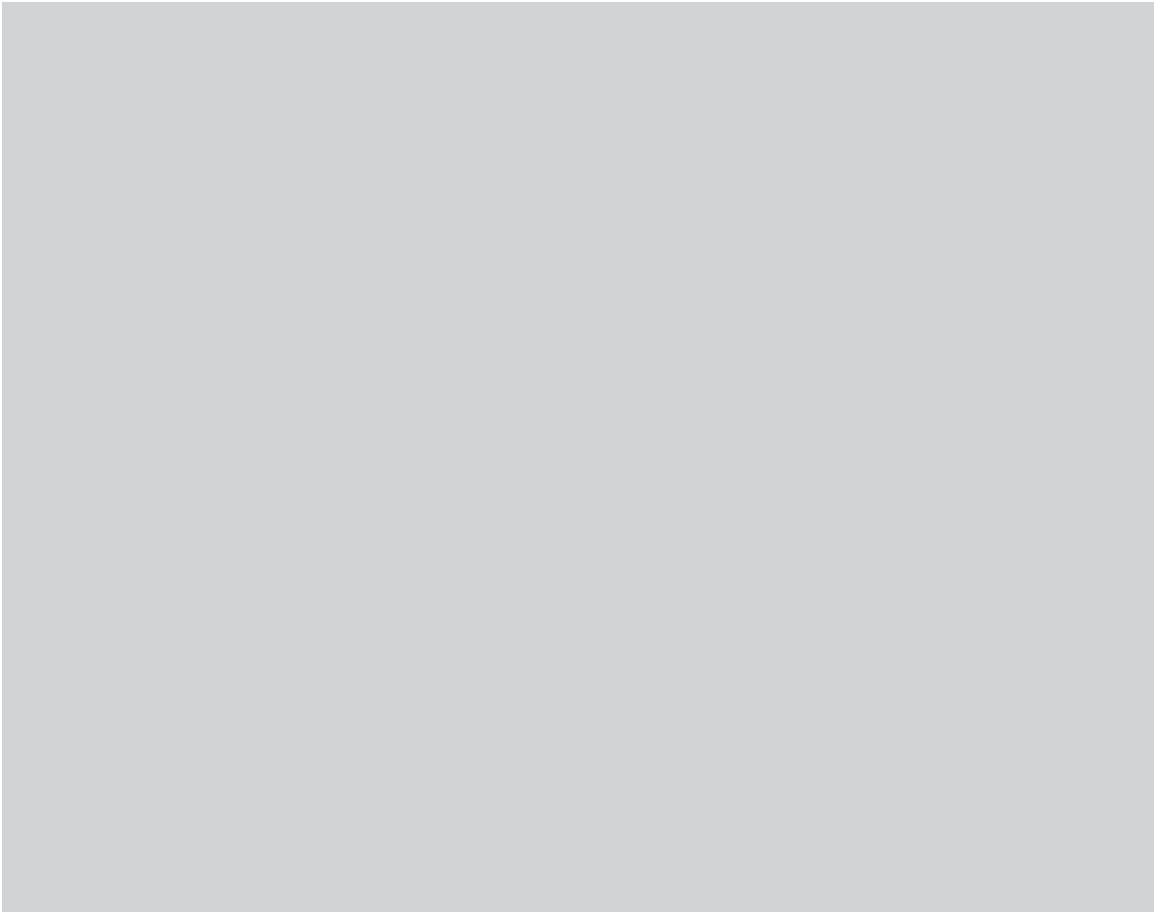
蜷川式胤肖像写真



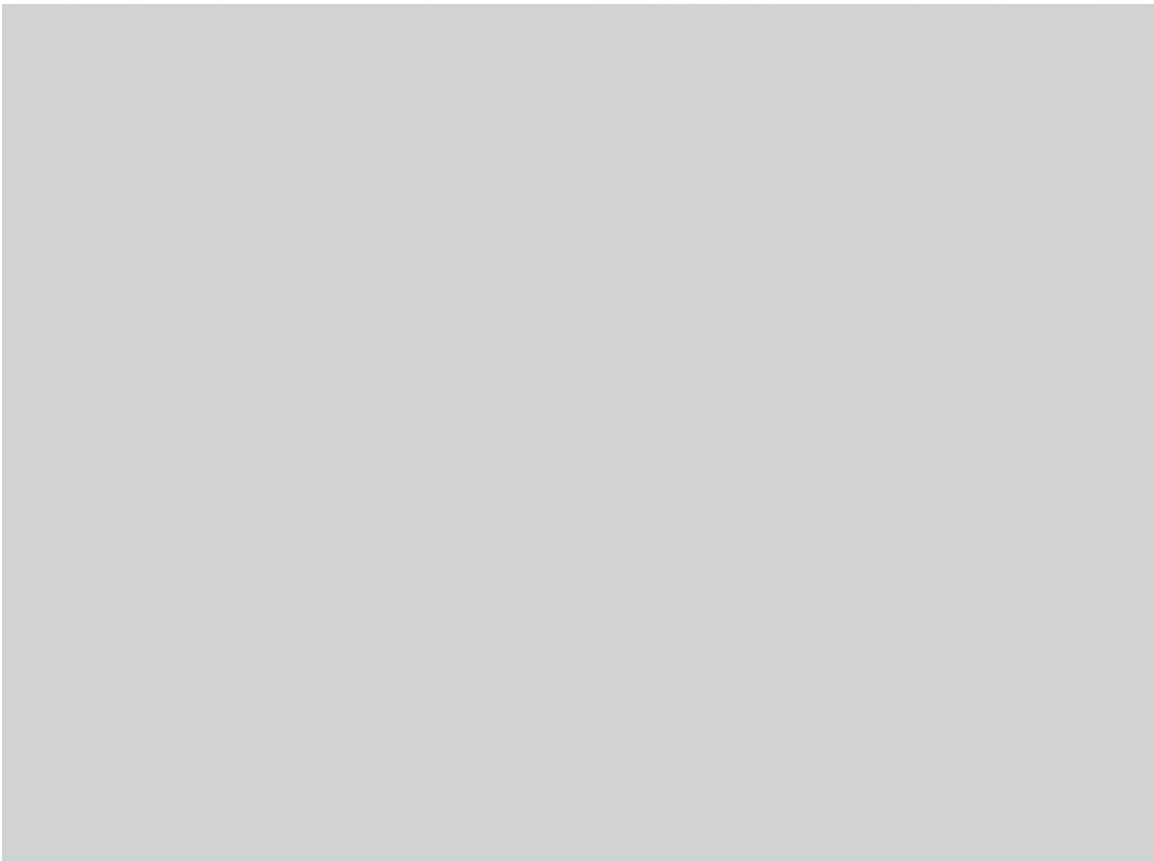
正倉院開封風景（ステレオ写真原板）



正倉院開封風景（蜷川家伝来の写真）



旧江戸城二重橋（旧江戸城写真帖の写真群より）



旧江戸城二重橋（蜷川家伝来の写真。橋上に多勢の人物が並ぶ）